

日本人の紅葉を愛でる心から見る自然とともに生きる日本人の心

1 紅葉がまぶしい季節です

10月も後半になると紅葉の季節になります。山々は燃えるような赤になったり、あるいは銀杏が黄色く色づく美しい季節です。この季節になると、心の中で歌声が響いてきますね。歌の題名を言う前に、まずその歌詞を書いてみましょう。

秋の夕日に照る山もみじ
濃いも薄いも数ある中に
松をいろどる楓（かえで）や蔦（つた）は
山のふもとの裾模様（すそもよう）
溪（たに）の流に散り浮くもみじ
波にゆられて はなれて寄って
赤や黄色の色さまざまに
水の上にも織る錦（にしき）

もうお分かりと思います。この歌は、作詞：高野辰之、作曲：岡野貞一による日本の童謡・唱歌「紅葉（もみじ）」です。岡野・高野コンビは、「紅葉（もみじ）」の他にも「故郷（ふるさと）」、「春が来た」、「春の小川」、「朧月夜（おぼろづきよ）」などの日本の名曲を数多く残していますが、この「紅葉（もみじ）」の歌詞も、「春が来た」や「朧月夜」そして「故郷」のように、日本人の美しい景色と、その景色をめぐる心を美しく歌っています。この歌詞に様な気持ちにならない日本人は少ないのではないのでしょうか。

さて、日本には四季があります。その四季の季節それぞれに「美しさ」があるのではないのでしょうか。春はすべての命が生きている喜びを表す季節。冬からやっと暖かくなって、色とりどりの花やその花に吸い寄せられる蝶々などの美しさは、「花」という単語に代表されています。この美しさから「華やか」と言うような単語も生まれてきていますね。

夏の生命力にあふれたまぶしいほどの緑は、春とは違った美しさを強さとともに持っています。なにしろ「伸びる」という感覚は、天に向かってゆくと言う感覚になります。青く突き抜ける空、そして、天に伸びる緑、場合によっては白い砂浜と、そして何より忘れてはならないのが、地上の者全てに恵みを与える太陽の暑さ、そして夕日の赤さが印象に残ります。春のやわらかい色合いと違って、原色系のはっきりした美しさがあるのではないのでしょうか。

冬は、冬で雪の白が基調です。すべての色を封じ込めて、すべての汚いものも美しいものもすべてを白い雪の下に押し込めてしまう。日本人の忍耐の強さや耐え忍ぶ心その強さを「白」と言う色一色で、きれいに彩ることができる美しさがあります。

さて、これらに比べて秋の美しさ、要するに紅葉の美しさは独特のものがあります。この美しさは、春や夏の美しさとは全く異なるものではないでしょうか。そしてこの各々の美しさの中に、日本人の心が表れているのではないのでしょうか。紅葉するという現象は、同じような気候で地理的な条件が合えば同じことができます。しかし、その現象に対して思う心は、各国の文化や習慣、そしてその文化に慣れ親しんだ人の心を表しています。

今回は、その中で「紅葉」を愛でる日本人の心に関して考えてみたいと思います。

2 モミジと紅葉

紅葉の代表は「モミジ」ですね。では「モミジ」をどうして「紅葉」と書くのでしょうか。

そもそも「もみじ」とは、「もみつ」という単語が変化してできた言葉です。「もみつ」とは「揉む」という言葉の中の一つであり意味としては「揉み出す」という意味になります。これは、木々が色づくことを、もともとは秋の寒さや秋口の霜、または朝晩の冷え込みなどによって、緑色の葉から、赤や黄色の色の葉を「揉み出す」というように考えられていたのです。もちろん、科学の無い時代のことですから、「揉む」のは「山の神々」であります。

山の神々は、基本的に日本では『女性』であるとされています。日本では、妻のことを「山の神」と呼称して男性が謙遜する表現が出てくることもあります。古い農村の間では、春になると山の神が、山から降りてきて田の神となり、秋には再び山に戻るという信仰があるとところもありますね。神が下りてくると「桜」がさき、山の神が山に帰ると「紅葉」するというような感じで神の移動を表す色として、農村では考えられていたのです。

山は農耕に欠かせない水の源であるということや、山には冬の間も針葉樹とはいえ木々に葉があり、「生きている」というような感覚があります。生物をいつくしみ、新たな種を生むのは女性の役目です。そのために、山の神は、女性であるとされていて、「木々」「稲などの植物」だけではなく、「小動物」や「昆虫」なども、山で生まれるとされていました。山の神は、女性であるために、1年に12人もの子供を産むとされ、それらがすべて里に下りてきたり、あるいは山で暮らして人々に恵みを与えてくれる。逆に山の神が怒ってしまうと、狼や熊などが人を襲うようになり、また、神が下りてこなくなって不作になるということになってしまうのです。

さて、山の神に関する解説はこの辺にして、山の神は、非常に美しいものを好みます。そこで、山の神は、里の稲が黄金色になって刈り取られた後になると、山に戻って木々に色を付けます。色を付けるために山の神は、寒くしたりあるいは場合によって霜を下ろし

たりして木々が本来持つ「美しい色」を「揉み出す」のです。揉み出すという感覚は、平安時代からもあった「草木染」によるもので、ちょうど白い布に草木から出した染料を浸した桶の中で揉んで色を定着させます。山の神々にとっては、「白い布」が「木々や葉」であり、草木染の元となる草木の本来の色を、たまに雨を降らせ、たまに温度を低くして、草木染のようにも見出し、そして、木々に「紅葉（こうよう）」の色を定着させるのです。神々が「こうよう」の色を作り出すという考え方は、当時の日本人が森羅万象すべてに神々が宿るという感覚があり、その感覚が「こうよう」も作り出すということになっているのです。

その「こうよう」の中で、最も代表的なのが「モミジ」です。

奈良時代は「こうよう」は「黄葉」と書いていました。これは、ある意味で「イチョウ」や「稲の黄金色」ということが念頭にあったことからそのような漢字が充てられたと思われる。イチョウやヤナギは葉が色づくとき黄色くなります。奈良時代は、それらの木の色のほうが主流であったのではないのでしょうか。そのために、奈良時代は「黄葉」を「こうよう」と呼んでいたのです。

しかし、白居易の「白氏文集」が840年くらいに伝来し、漢詩を書くことがブームになると、その文集の中の一つの漢詩が話題になります。

林間煖酒焼紅葉	林間に酒を煖めむと紅葉を焼く
石上題詩掃緑苔	石上に詩を題せむと緑苔を掃く

この「白氏文集」の影響から平安京時代、特に古今和歌集以降になると「こうよう」を「黄葉」ではなく「紅葉」と書くようになってゆくの。同時に、こうようを愛でるといふことになると、「赤くなる葉」を珍重するようになり、平安時代の庭園や寺院を作るときにはモミジを中心に植えて、人工的に庭園を形成するようになります。京都の寺院の紅葉は非常に美しくまた千年を超える伝統がありますが、しかし、それらは自然に生えたものではなく、人工的に寺院を作るようになったのです。

当然に平安の人々は山賊が出るかもしれない山まで紅葉を見に行くことはしません。近くに人工的とはいえ、美しい「紅葉」を見ることができるのです。そのためにその代表であるモミジを「紅葉」という漢字をあて、なおかつ「揉み出す」という意味の「モミジ」という呼称を与えたのです。

現在も「紅葉」の名所は限られています。これは、平安時代以降大規模に楓紅葉(かえでもみじ)を中心に庭園・山野を形作って行ったものであり、千年を越える人が思う秋の風情を作り上げる努力によるものだから、名所が限られてしまうのです。

3 万葉集では「こうよう」は「黄葉」と書いていた

このように考えてみると現在の「紅葉の名所」は京都が中心で、平城京のあった奈良には少ないということに気づきます。奈良公園の紅葉といっても、京都の紅葉のような「真っ赤」なイメージはありません。イチョウなど黄色の絨毯のように広がった葉の上に鹿がいるというような光景が思い浮かびます。奈良公園のこうようは「黄色」と「紅」が混じった感じになります。

では、その万葉集にはどのような黄葉が出ているのでしょうか。

実は万葉集には百を超える「黄葉」の歌が掲載されています。これに対して「紅葉」という単語の歌は一種しかありません。

妹がりと 馬に鞍置きて 生駒山 うち越えくれば 紅葉散りつつ (十 - 2201)

「彼女に会うために現在の自家用車である”馬”の背に鞍を置いて生駒山を越えてきたところ、そこはもう秋で紅葉が散りはじめていた」という意味の歌で、はるばる田舎の大坂またはそれより遠方の西国から奈良の都に彼女に会いたい一心で来てみたら、実は生駒山のモミジはすでに紅葉していたのですね。当時も今も「都会の女」といえば、少々ステータスがあったのではないのでしょうか。その女性に会いたい一心で生駒山を超えろとは、なかなかロマンのある歌ですね。では、この男性、都会に住んでいる彼女とはうまくいったのでしょうか。私は、うまくいかなかったのではないかと考えています。

万葉集や古今和歌集の中で「紅葉」「モミジ」「黄葉」というような言葉は、葉の色が変わることから「心変わり」という意味も含まれます。『万葉集』では、うつろい、散るところから、「移る」「過ぐ」にかかる語として「黄葉の」という枕詞もあるほどです。要するに、この男性は「一生懸命生駒山を超えた」けれども「すでに二人の関係は『秋』で、心変わりをした女性の心は散りはじめていた」というような読み方もできますね。実際のところはよくわかりませんが、葉の「色が変わる」ということから「心変わりを表す枕詞にする」などというのは、日本人の自然と調和した心の動きをよく表しているのではないのでしょうか。

そのように見てみると、「黄葉」という単語を使った歌でも「悲恋の歌」が多いのが万葉集における紅葉の特徴ではないのでしょうか。

穂積皇子と言えば、同じく天武天皇の皇子で異母姉か妹の但馬皇女との恋で有名です。しかし、但馬皇女は高市皇子の妃ですから、そのような恋愛は許されません。穂積皇子が勅命により、近江の志賀寺に遣わされ、二人の仲は裂かれてしまいます。この二人の恋は露見し、持統天皇の命令により穂積皇子が罰されたと考えられます。その、但馬皇女のもとを離れ、仲を引き裂かれて近江に使わされた時の歌が、万葉集の中に残されています。今朝の朝明雁が音聞きつ春日山黄葉にけらし我が心痛し (巻八 - 1513)

「今朝の夜明けに雁の声を聞いた。おそらくもう春日山も黄葉はした頃だろう。そう思うと我が心も痛む。」

秋萩は咲きぬべからし我が屋戸の浅茅が花の散りぬるを見れば (巻八 - 1514)

「秋萩は咲くべき時になつたらしい。私の家の浅茅の花がすっかり散ってしまったのを見ると。」

穂積皇子は、秋が来た事に、美しさを見出すよりも、悲しみの情の方を強く感じており、「わが心痛し」として表現されています。確かに、この「痛し」という形容からは、ただ切ない、何となく物悲しいというよりも、文字通り痛切な感情の方をより強く感じます。やはり、但馬皇女との悲恋への苦悩・悲しみが連想されてきます。

その但馬皇女も、和銅元年の六月に若くして死んでしまいます。穂積皇子は、その死を悼み挽歌を残しています。

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに（巻二 - 203）

「降る雪よ、あまりたくさん降ってくれるな、吉隠の猪養の岡に眠るあの方が寒いだろうに。」

自分と最愛の但馬皇女が引き裂かれたときは「黄葉」を使って、心変わりまたは自分の運命の代わりということを表現しています。恋の花が咲き、そして盛りの夏を過ぎて、秋になってしまった。その終わりかけの恋と、その恋の美しい思い出は「黄葉」という言葉でうまく表現されています。そして、その後、永久の別れには「雪」という言葉を使い、冬のイメージを「冬」そして「閉ざされてしまった恋」ということで、表現されているのです。秋と冬の季節のイメージまで使った、非常に素晴らしい歌といえますね。現代社会で、季節や季語、枕言葉などをうまく使い、直接的な表現を行うことなく、美しい表現で、それでも目の前に絵が浮かぶようなこのような言葉をつかえる人は大変少ないのではないのでしょうか。万葉集の時代の歌人が、文化人であり、同時に現代のような直接的な表現を使うことなく、自分の心を季節や自然のものに例えてうまく表現したのは、やはり自然を愛でる心を持っていて、その感性が研ぎ澄まされていたからではないのでしょうか。

4 王家の黄色と黄色の葉

では、奈良時代はなぜ「黄色」が中心であったのでしょうか。

実は「黄色」にも意味があります。一般には、この黄色は「黄泉の国」に通じるのではないかとわれています。しかし、冒頭の「紅葉」の歌詞をよく思い出してください。「松をいろどる楓（かえで）や蔦（つた）は山のふもとの裾模様（すそもよう）」とあるとおりに、イチヨウなどの黄色く彩る木々は、山のすそ野のほうに広がっています。そのために、黄泉の国に通じる山の上の方には、実は黄色く色づく黄葉は少ないということになるのではないのでしょうか。

山の裾が「黄泉の国」につうじるというのでは、いささか問題がありますし、また、黄泉の国が「移ろう心」とか「心変わり」という枕詞に通じるのも、少々おかしな話になります。

万葉集の中で「黄葉」がうたわれながらも、黄泉の国とつながらないものもあります。

秋山の黄葉(もみち)を茂み迷(まと)ひぬる妹を求めむ山道知らずも (208)

「秋の山の黄葉があまりに茂っているの、迷い入ってしまった恋しい妻を探し求めるに、山道がわからない。」

これは有名な柿本人麻呂の長歌の反歌の一つです。人麻呂は、軽の里、現在の奈良県橿原市大軽町あたりに住んでいた女性を妻にしていました。なぜか葬儀に出席できない人麻呂は、その妻の死亡の伝えを受けた後、思い出の地を悲しみにくれ彷徨しています。その彷徨するさまを「黄葉(もみち)を茂み迷ひぬる」というように表現しています。この表現から亡くなった妻は、黄泉の国にいたのではなく、里にいたということを意味しています。また人麻呂の心も当然に山で迷っているのですから、黄泉の国に入っていません黄泉の国を連想させるようにはしているかもしれませんが、しかし、黄葉と黄泉の国は別物であるということになるのです。

では、なぜ奈良時代は「黄葉」と、黄色を重視したのでしょうか。

これは、奈良時代が「天平文化」というように中国の仏教文化に強く影響された時代であったということに由来しています。

この時代に中国の陰陽五行説が伝わり、仏教とともに日本の文化や思想に非常に強い影響を与えます。

陰陽五行説というのは、中国で作られた占いというか、哲学というようなものです。古代中国では、自然界のあらゆるものを陰(いん)と陽(よう)にわけました。たとえば、太陽は陽で月は陰、奇数が陽で偶数が陰、表が陽で裏が陰という具合になります。こうした思想を陰陽思想といい、この陰陽思想はやがて五行と結びついていくことになります。五行の思想は自然界は木(もく)、火(か)、土(ど)、金(ごん)、水(すい)の5つの要素で成り立っているというものでした。五行の行という字は、巡るとか循環するという意味があります。5つの要素が循環することによって万物が生成され自然界が構成されると考えられていたわけです。この中で、自然界だけでなく、方角と色が組み合わさって、様々な「まもりがみ」になっていったのです。現在でも大相撲で土俵上の吊屋根の四隅に4色の房が垂れ下がっていますが、これを四房(しぶさ)といいます。四房のそれぞれの色は四季と天の四神獣をあらわし、五穀豊穰を祈念しているともいわれています。その四房のそれぞれの色は四季と天の四神獣とは高松塚古墳などにも書かれているもので、

正面東側	(東北)	青房	東方の守護神	青龍神(せいりゅうしん=青い龍)	春
向正面東側	(東南)	赤房	南方の守護神	朱雀神(すざくしん=赤い鳥)	夏
向正面西側	(西南)	白房	西方の守護神	白虎神(びやっこしん=白い虎)	秋
正面西側	(西北)	黒房	北方の守護神	玄武神(げんぶしん=黒い亀)	冬

というようになっているのです。

そしてこれらの真ん中が「黄色」であるとされています。要するに黄色は陰陽五行の考え方では黄色は特別な色で中央を意味するということになります。秦の始皇帝の時代から、皇帝の服は黄色とされていますし、日本においても黄色は天皇のいる場所として考えられていました。当時の絵巻物でも、黄色の服を着るのは、天皇陛下であったのです。

このような考え方から、奈良での「こうよう」は「黄色」とされていたのです。これが「白氏文集」の伝来以降、徐々に「紅葉」に代わっていったのです。

黄色の葉を見て、一年の法則などを味わい、天皇しか身にまとわない「黄色」を愛でるということは、なかなか良いことであったのかもしれませんが。平安時代になって国風文化になると、陰陽五行説の考え方が薄れ、黄色という感覚になったのかもしれませんが。そこから、日本独特の「紅葉」が生まれてきたのです。

5 紅葉は見るものではなく「狩る」ものという認識

さて、この紅葉の季節は、「紅葉狩り」をしますね。春の花見は「花見」であるのに、「紅葉」は「狩る」という単語を使います。採取するわけでもなく、触れることもなく楽しむのになぜ「狩り」なのでしょう。

「狩り」は、もちろん私たちが現代も使う、獣を捕まえるという意味からきています。それが、獣より小さな野鳥や小動物にも用いられるようになり更に果物などを採取する意味にも使われるようになったのだそうです。確かによく考えて見ると「ぶどう」や「いちご」にも「狩り」が使われていることに気がきます。

このことから「狩り」とは「自然にあるものを自分のものにする」という意味があるようです。花見の「花」は桜ですね。以前の文章で紹介したように、稲の神様である「さ」が座る場所「くら」であるので「さくら」となります。要するに、「桜」はあくまでも「神様」のものであり、人間が自分のものにすることができません。それだから、どうしても「さくら」は「狩る」ことができず「見る」ことしかできないのです。

これに対して、「紅葉」は、神が「揉み出した」色であっても、それはあくまでも里のものです。だから、稲や木の実と同じように「狩る」ことができます。山の神は揉み出した後、山の神がそこに宿っているわけではありません。それだけに、里の人は色づいた後のモミジは、小動物や野鳥、またはイチゴや果物と同様に「狩る」ことができるのです。また、紅葉狩りが行われる十月は「神無月」といわれる月です。この月は出雲大社に全国の神が集まって一年の事を話し合うため、出雲以外には神がいなくなると言われ、紅葉狩りをするとき、里に神がいない時期でもあります。まさに、そのことが「自然のものを狩る」というような感覚を持っているのではないのでしょうか。

では、「見るだけ」なのに「狩る」というのは、どういうことでしょうか。

これは、武器を持ったり狩りをしない平安の貴族が、自然の中に出て「見つける」「探し出す」というだけで「狩る」という言葉を使うようになったのです。要するに、平安の貴族たちは、自然を愛でて心の中に留めることが、「心の中で自分のものにしてしまう」ということで「狩る」という言葉を使うようになってきたのです。眺めたり見たりして心に留めることを「狩り」と表現して、風流に過ごすという習慣が、現在まで伝わってきているのです。

ちなみに、京都の寺などでは「狩り」をすることは古くは「殺生」につながるとされて、非常に忌み嫌われていました。そのために「紅葉狩り」ではなく「紅葉借り」というような漢字が充てられたりします。寺の間の作り方で「借景」というものがあります。庭園外の山や樹木、竹林などの自然物等を庭園内の風景に背景として取り込むことで、前景の庭園と背景となる借景とを一体化させてダイナミックな景観を形成する手法です。この借景も、「紅葉借り」という単語から、寺そのものが「自然のものや他人の物、神に物を寺のものとして独占しない」という宇宙観があり、その宇宙観に基づいて、作っているために、紅葉も「狩る」のではなく「借りる」形になってくるのです。しかし、漢字を変えても行っていることは同じで、安土桃山時代に建立された京都の高台寺などは、計算された紅葉の配置で、まさに安土桃山時代の絢爛豪華さと、京都の風流さ、そして寺院の静けさを併せ持った名所として知られています。ちなみに、高台寺は、豊臣秀吉の正室寧々が隠居所として住んでいたところでした。

このように、日本人は紅葉を特別なものとせず、神様が揉み出して人間に残してくれた美しいものとし、その神様の置き土産を愛でて心の糧にしてきたのです。心の糧にするから「狩る」ことにより、自分のものとして記憶にとどめるのです。このように里の美しさは、里のみんなの物であると同時に、一人一人が自分の大切な一年の思い出として心の中に留めます。そして、心の中にその記憶をとどめておくことができるから、寒く厳しい冬を耐えて過ごすことができるのです。

冬はこれから中にこもる季節です。一年を締めくくるように山が最も美しい姿になり、今年一年の彩りを決めて行くのです。紅葉が終わると、そろそろ日本も冬の季節になります。風流なもので外で遊ぶのも紅葉狩りが一年の最後になります。その最後だからといって悲観的になったり、儚んだりするのではなく、その美しさを心にとめて、また冬の厳しさも受け入れる。その自然とともに生きる心、そして厳しいものも一年の終わりも、すべて美しいものとして感じ入れる。その感覚こそ、そして自然を受け入る、いや自然とともにあるのが、日本人の生きざまなのではないでしょうか。